

繊細な無意識

かつて、
キリスト者の内村鑑三が、
我々の胸を衝く、
次のような主旨の言葉を残しています。

人々は、なぜ、かくも悲しい物語を求めて読み、
悲劇の演劇を好んで観るのであろうか。

彼らは、悲しい物語や悲劇の演劇によって、
ことさらに涙を流す。

しかし、悲しみや悲劇は、
現実の人生に、かくも溢れているではないか。

それにもかかわらず、なぜ、人々は、
現実の人生における他人の悲しみや悲劇を見て、
涙を流すことをしないのであろうか。

この内村鑑三の言葉は、
現代の人間の感性の摩滅を嘆く言葉にも読めます。

しかし、この言葉を読むとき、
なぜか、もう一つの思いが、心に残ります。

我々の摩滅した感性が、
目の前の「現実」の悲しみに気がつかないのではない。

目の前の「現実」が余りにも悲しみに溢れているので、
我々の繊細な無意識は、
「虚構」の悲しみの中に逃げ込もうとしてしまうのではないか。

その思いが、心に残るのです。